

おらみ漁具図鑑

24 エビタツベ半製品

部品ごと作り足し 効率化

この写真は、琵琶湖で主にスジエビをとらえるエビタツベという道具の部品一式である。作製上の未完成品という意味で「半製品」ともいう。琵琶湖博物館の収蔵庫には、こうしたエビタツベの半製品が50点あまり保管されている。

長方形のものは、細く割った竹を簀状に編んだ部品で、これを筒状に丸めてガワ(胴)にする。扇形のは、丸めると先がすぼまった漏斗状の部品、通称ノドになる。これを筒の一方に付けて入り口にし、反対側には丸いブリキ板をはめて底にする。

エビタツベの半製品が多く残されている理由のひとつは、その独特の作業工程にある。

筆者はいちど沖島(近江八幡市)のベテラン漁師にお願いして、エビタツベ作りの一部始終を見せてもらったことがある。一言でいえば、これは大変手間のかかる仕事である。

たとえばガワとノドでは、1本ずつの割り竹の長さが違う。同じ編むにしても、ノドは半円形にするので編み方が特殊である。枠、たが、栓、底板などごまごまとした部品も多い。これを効率化するには、部品ごとに多数を作りためて

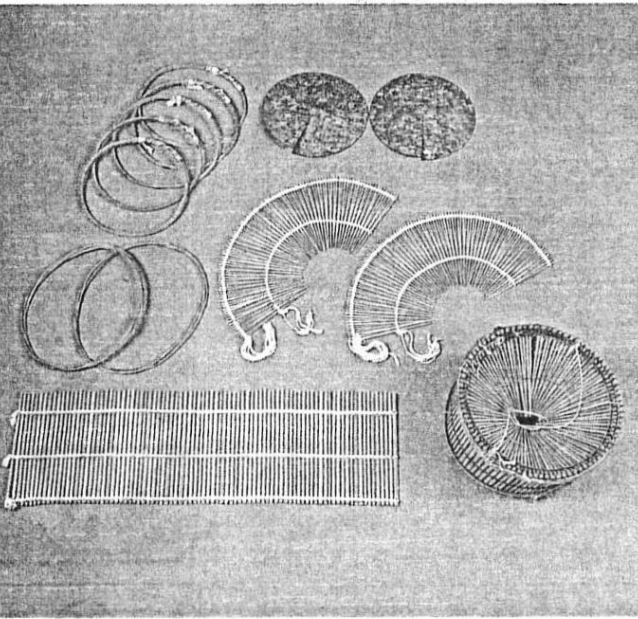
おき、それを組み合わせるのがよい。

だから漁師の家には、同じ長さや厚さ、形状に加工された割り竹のストックがあり、これと同じ寸法に編んだガワやノドの部品があった。これが残されたのが写真の半製品というわけである。当然、部品ごとの寸法は一定で、完成品の形もぴたりと同じである。

半製品が多い背景には、漁具の「数」の問題もある。エビタツベは100〜150個をはえ縄状にし、これを数セット仕掛ける。1軒で使う数は1千個にもなる。しかも道具は消耗品で、耐用は長くて5年程度というから、つねに作り足していく必要がある。エビタツベ作りに効率化や「規格」化が求められた所以である。

道具づくりは寒い時期の夜なべ仕事。妻が部品づくり、夫が組み合わせ、という分担が多かったと聞く。琵琶湖の漁師の家族は、一面では竹細工職人のような顔をもっていたのである。残された数多くの半製品は、黙々と手仕事にいそむ冬の漁師の家の光景を彷彿とさせる。

(琵琶湖博物館学芸技師 渡部 圭一)



エビタツベ半製品。上段左から枠(直径18釐)、底板(同)、中段左からたが(長径22釐)、ノド(幅30.5釐)、下段左からガワ(56.5釐)。右下は完成品